

一八八四年六月二十五日(水)

タクール、聖ラーマクリシュナと学者シャシャダルとの会見

イシヤンの家を訪問される

今日は山車祭ラタヤートラである。一八八四年六月二十五日、水曜日。アシャル月白分二日目。タクール、聖ラーマクリシュナは、午前中にカルカッタのイシヤンの家においでになった。ターインタニヤにイシヤンの家がある。イシヤンの家から程遠からぬカレッジ街のチャテルジー家に、有名な学者のシャシャダルパンデラトが滞在しているというところをお聞きになって、タクールは是非ともその学者に会いたいと希望されるので、夕方、その学者のところに行きつしやることに決まった。

時間はほぼ十時ころ。聖ラーマクリシュナはイシヤン家の階下の応接間に信者たちといっしょに坐っておられる。イシヤンが親しくしているバツタパラのバラモンが来ている。なかの一人はバーガヴァアタクリシュナを描いたヒンドゥー教の聖典の学者である。タクールのお伴してきたのはハズラーとほか少数の信者たちだ。スリシュをはじめ、イシヤンの息子たちも同席していた。シャクティ派の信者も一人来ていた。その人は額に朱色シンドルの丸印をつけている。タクールは面白そうにその朱色シンドルの印を見

て、笑いながらおっしゃった。——「あの人には商標マールクがついているよ」

間もなく、ナレンドラと校長がカルカッタの自宅からここへやって来た。彼等はタクールにごあいさつしてから、タクルのそばに座を占めた。タクールは、校長に前もって言っておおきになったのである——「わたしはこれこれの日にイシヤンの家に行っているから、お前もおいで。ナレンドラを誘っていっしょにおいで」と。

タクールは校長におっしゃった——「いつか、お前の家に行くよ——お前の住居すまいはどの辺だね？」

校長「はい、現在はシャームプクルのテリバラにおります。学校の近くでございます」

聖ラーマクリシュナ「今日は学校に行ったのかい？」

校長「はあ、今日は山車祭ラタ・ヤートラの休日でございますから——」

ナレンドラの家は、父親が亡くなってからというものの、極度に困窮していた。彼は長男で、下に小さい弟や妹がいるのだ。父親は弁護士だったが、遺産は何も残さなかった。家族を養うために、ナレンドラはあれこれと仕事を探して苦労している。タクールは、ナレンドラの仕事を見つけてくれるようにと、イシヤンはじめ信者たちに頼んでおられた。イシヤンは会計監査局の局長だ。ナレンドラの家が困っているのを聞いて、タクールは常に心を配ってくれていたのがであった。

聖ラーマクリシュナ（ナレンドラに）わたしは、イシヤンにお前のことを話してあるよ。イシヤンがアスアシュラ（南神村のカーリー寺院）に来たから——それで、話したんだよ。あの人は知り合いが多いし——」

イシヤンは、タクトルを招待して来ていただいたのであった。この機会に、数人の友人を招いたのである。歌が始まる様子だ。パカワジ、バンヤ、タブラ、およびタンプーラが準備された。家の人が、パカワジのために容器いれものに粉を入れて持ってきた。時間は十一時ころである。イシヤンの希望でナレンドラが歌をうたうのだ。(訳註、パカワジ——両面太鼓。バンヤ、タブラ——共に太鼓で対つで使用し左手でバンヤ、右手でタブラをたたく。タンプーラ——伴奏用の弦楽器)

聖ラーマクリシュナ「(イシヤンに) まだ、粉かい! このぶんじゃ、えらく遅くなるね!」(訳註——パカワジを演奏する時は手の滑りをよくするために粉を用いるが、それと料理に使う小麦粉をかけて、食事の用意が遅いと冗談を言っておられる)

イシヤン「あつはつはつは。いえ、そんなに遅れはいたしませんよ」

信者たちの誰彼が声をたてて笑った。バーガヴァタの学者も笑いながら、或る読み人知らずの有名な詩(原典註)を口ずさんだ。詩を朗読した後で、学者は説明を加えた。——「哲学書や経典よより詩の方がずっと面白い。詩を読んだり聞いたたりできる人にとつては、ヴェーダーンタ、サーンキヤ、ニヤーヤ、パタンジャリ(ヨーガ学派)といったような哲学が、実に味気なく感じられます。そして、詩より歌曲の方が面白い。歌は岩のような心をも溶かします。しかし、歌がどれほど魅力的でも、美しい女性がそばを通つたら、詩にも歌にも興味がなくなり、心こゝろの全部が、その女性に惹きつけられてしまします。しかし又、ひもじくなつた時は、詩も歌も女性も、何にも興味がなくなり、即ち、パンの問題が第一であります!」

聖ラーマクリシユナ「ハッハッハッハ、おもしろい人だね」

パカワジの用意ができた。ナレンドラが歌をうたった。

歌が始まるか始まらぬうちに、タクールは階上（にかい）の居間で休まれるために出て行かれた。校長とスリシユがついて行つた。その部屋は道に面している。イシャンの義父（じふと）、故クシエートラナート・チャトジェー先生が作った部屋である。

校長はスリシユを紹介した。こう言つて——「この人は学者で、しかも大そうおだやかな性格の人でございます。子供のころから、この人と私とはいつもいっしょに勉強してきました。今、弁護士をしておられます」

聖ラーマクリシユナ「こういう人が法律屋をしているとは、まあ！」

校長「この人にとっては不適當な道でした」

聖ラーマクリシユナ「わたしもガネーシユという弁護士を知っている。あそこ（カーリー寺院）に旦那方といっしょに時々来るんだよ。あまりハンサムじゃないが、歌はうまかった。わたしのことをえらく尊敬してくれてね、素直な人だよ。

（スリシユに向かつて）——あなたは、一番大事なことをどう考えているのかね？」

（原典註）「詩は哲学書を切り捨て、歌に詩は切り捨てられる。それも女性との楽しみに切り捨てられる。すべてを切り捨てるのは空腹である」（奥田博之翻訳「ラーマクリシユナの福音」より引用）

スリシユ「神様はいらっしゃいます。そして、あの御方がすべてのことをなさるのです。しかし、われわれが考えている神の性質は正しいものではありません。人間が、あの御方のなさることを、どうして理解できませんか。無限の文章なのですから！」

聖ラーマクリシユナ「庭に何本の木があるか、木に何本の枝があるか——こんなことを計算するのがあなたの仕事かい？ あなたは庭にマンゴーを食べに来たんだから、マンゴーを食べなさい。あの御方に信仰と愛を養うために人間は生まれてきたんだよ。あなたはマンゴーを食べていきなさい。

あんたが酒を飲みに行ったとき、酒屋にどれだけ酒があるか調べるのがあなたの仕事じゃないだろう！ コップ一ぱいであんたは十分なんだよ。

あんたは、無限の文章を知る必要はないんだ。

あの御方の性質は、千万年考え続けても、何も分かりはしないんだよ」

タクールは、ちよつと黙っておられる。また、再びお話しをなさった。バツタパラから来たパラモンもそこに坐っている。

聖ラーマクリシユナ「(校長に向かつて) 世俗の生活には何にもない。このイシヤンの家庭はいいがね。でも、もし息子たちが女狂いをしたり、大麻ばかり吸っていたり、大酒飲みだったり、親に反抗ばかりするようだったら、一生苦勞の絶え間がないだろうよ。家族のみんなが神様の方に心を向けている——光明の家庭だ——こんなのは先ず稀まれだね。こんな家庭を、一、二、三知っている。しかし、大方は年中ケンカしたり、もめごとがあつたり、やきもちを妬いたり、その上、病人がいたり、不幸

があつたり、貧乏だつたりだ。そういうのを見て、わたしは大実母ママに頼むのさ——ママ、廻れ右をさしておくれママ。ツて。ご覧、ナレンドラがどんなに苦勞しているか。お父さんが死んで、家族は食べていけないんだよ。仕事探しに一生懸命だが、まだうまくいかない。気もそぞろで歩き廻っているんだよ。

校長、お前さん、以前はよく来たが、近頃はあまり来ないね？ 大方、奥さんと仲が良すぎるんだらう？

責めるわけにもいかないさ。四方八方、女と金ばかりだもの！ だからわたしはこう言つてる——
「ママ、もしまた肉体をまとつて来るようなことがあつても、世俗的な人間にはしないでくれ」とね」

聖ラーマクリシユナ「ああ、しかし、大そう難しいんだよ」

タクールは話題をお変えになった。

聖ラーマクリシユナ「(校長に向かつて) わたしらは下手ますいことをしたんじゃないかな？ あの人がちが歌つているのに、ナレンドラが歌つてるのに、それなのにわたしが皆こつちへ来てしまつて！」

末世カリユガには信仰バクテイのヨーガ——カルマ・ヨーガではない

四時頃、タクールは馬車に乗られた。タクールのお体は、極度に注意深くそつとお護りしなければならぬのだ。そのため、街路をお歩きになるのは難しいので、馬車を利用するのだから、さほ

ど遠くないところへでも行くことは出来ないのである。馬車に乗られたタクールは、腰掛けるとすぐ三味にお入りになった！ やがて、雨がポツリ、ポツリと降ってきた。雨期なので空は雲が厚く、道はぬかるみだ。信者たちは馬車の後から歩いて行く。山車祭ラダ・ヤートルなので、男の子たちがお祭り気分ですユロの葉を笛のようにして鳴らしているのが見える。

馬車が玄関に着いた。家の主人と親族たちが並んで出迎えていた。

二階にあがると、すぐ応接間——上がり口のところパンディットで、学者シヤシヤダルがタクールをお迎えした。この、正統ヒンドゥー教界の重鎮で、著名なサンスクリットパンディット学者である人は、すでに若さの面影もない中年過ぎの人物である。肌の色は輝くように白い、と言つてもよいほどで、首には数珠をかけている。彼は非常にへりくだつて、仰ぎ見るような態度でタクールにあいさつした。それからタクールといっしょに応接間に入って坐つた。後から信者たちがぞろぞろ続いて入り席についた。

誰もが、なるたけタクルの近くに坐つて、聖なるお口から出る不滅コタムリトの言葉の甘露を飲みたいものと心から熱望している。ナレンドラ、ラカール、ラーム、校長、その他大勢の信者たちが同席していた。ハズラーまでタクールに従ついて来ているのである。

タクールは学者を眺めているうちに前三昧状態になられた。まもなくその状態のまま、ニコニコしながら学者の方に目を向けておっしゃつた——「いいね！ いいね！」そのあとで、「そうだ、あんたはどんなふうレレシヤに講義するんだね？」

シヤシヤダル「先生、私はヒンドゥー聖典の内容を何とかして一般大衆に理解させたいものと、努

力しておるのでございます」

聖ラーマクリシュナ「末世ではナーラタのような信仰が一番だ。聖典に書いてあるいろんな勤行をする時間のある人がいるかい？ 近頃は、熱が出て木木の根の煎じ薬くらいではだめだよ。煎じ薬がゆつくり効きはじめる頃には病人の方がまいつてしまう。現代の病人には強い解熱剤を与えなければ——。聖典に書いてあることを勧める場合は、頭とシツポをとって、その人が食べられる部分だけを与えておやり——。わたしは皆にこう言っている——『アーポーダンニヤーニヤ(サ^{〔訳註〕}ンデイヤー^{〔朝〕}とタ^{〔夜〕}に行う祈りで唱える文句)なんて唱える必要はない。お前たちはガーヤトリを唱えるだけでいい』と。聖典にある詳しい祭祀のやり方などは、イシヤンのような人、一人、二人に教えるといいよ」

〔世俗的な人と講義〕

「何千回講義しても世俗的な人間には何の効能もない。石の壁に釘が打てるかい？ 釘の頭がこわれでも石壁はビクともしないさ。刀を打ちつけたって、ワニがどうにかなるかい？ 修行者が持つているヒョウタンの水筒は、持ち主といっしょに四大聖地をめぐるだろうが、苦いやつはやっぱり苦いま

(訳註1) ガーヤトリ——パラモンの男子が一日に三回、定期的にくりかえすヴェーダの中の聖句

オーム プール プヴァ スヴァハー タット サヴィトール ヴアレーニヤン

バルゴー デーヴァーシャー デイーマヒー デイヨー ヨー ナ ブラチョーダヤート

まだ。あなたの講義は、この世のことにかまけている連中にはあんまり役には立たないよ。でもそういうことは、あなたもだんだんわかってくるだろう。仔牛もはじめから上手に立って歩けはしない。ときどき転んだり、また起きたりして、だんだん立って歩くことをおぼえる」

〔最高の熱愛と分別——神をつかめば行事捨離——ヨーガと三昧〕

「あなたはまだ、神の信者と俗人との区別がつかないだろう。それも、あなたが悪いんじゃない。最初、嵐が巻き起こったときは、どれがタマリンドの木かどれがマンゴーの木か見分けがつかなくなるもんだ。

神を体得まなければ、誰だつてすっかり行事を捨てることはできない。朝夕の礼拝などの行事はいつまでしているものだろうね？ 神様の名を聞いただけで涙がこぼれて、身の内がふるえるようになるまでだ。一度、^ッオーム、ラーマ^ッと言っただけで目から涙があふれてくるようになったら、あなたの仕事も終える。そうなれば、もう朝夕の礼拝はいらない。

実がなれば花は落ちる。信仰が実で、いろいろの行事は花だ。家の嫁が子を孕めば、あまりたくさんの仕事はできなくなる。姑は日毎に仕事を減らしてくれる。十カ月になれば姑はほとんど仕事をさせない。赤ん坊が生まれたら、嫁はその子を抱いて、ただヨシヨシと子守しているだけ、他の仕事は何もしなくてもいい。規定の礼拝はガーヤトリーの中に溶けこむ。ガーヤトリーはプラナヴァ(オーム)に溶けこむ。オームは三昧に溶けこむ。ちょうど鈴のひびきのように、トーン、トーン、トーン、と。

ヨーギーはオームのひびきをたどって至高ブラフマンに溶けこんでゆく。夕拝などの行事は、その三昧の中に溶けこんでゆく。こんなふうにして、智者たちは行事捨離を成じていくんだよ」

ただの学問だけではいけない——修行および識別と離欲

三昧の話をなさっているうちに、タクールご自身がその状態になっておしまいになった。月のように神々しいお顔から、天上の光が輝き出ている！ もう外の意識はなく、お口からは一言も発せられない。目は静止して！ きつと宇宙の主に会っておられるに相違ない！

かなり経ってからやや平常に戻られて、子供のようないくさくさした口調でこうおっしゃった——「わたしは水が飲みたいよ」——三昧のあとで水がほしいとおっしゃったときは、少しづつ外の意識が戻ってきている徴候しるしだということを、信者たちは承知している。

タクールは半三昧でこうおっしゃった——「マー！ いつか、イーシュワラ・ヴィディヤサーガルに会わせてくれたね。そのあとで、わたしはまた、『マー！ もう一人学者に会いたいよ』と言ったので、わたしを此処につれてきてくれたんだね」

その後で、シャシャダルの方をご覧になりながら——「ババ！ もうすこし体力をつけなさいよ。それから何日か修行サダナや讃神歌パujanをして——。木にも登らずに果物の房をとろうとしているが、まあそれも皆によかれと思っっているんだらうけれど——」（訳註、ババ——父を意味するが、尊敬を込めた相手への呼びかけにも使われる）

こうおつしやつて、シヤシヤダルに向かつて深々と頭を下げてノモシカルなさつた。(訳註、ノモシカル—頭を下げてのあいさつ、ヒンデー語でナマスカール)

つづけて又、こうおつしやつた。——「はじめてあんたのことを聞いたとき、わたしはこう訊ねたよ——『その学者はただの学者か、それとも識別と離欲を行じている人か』と！」

〔下命さしずがなければ宗教の教師にはなれない〕

「識別さしずを行じていないような人は、学者パンディットとはいえないよ。

お下命さしずがあれば人々を導いても差し支えない。神のご命令を受けて人々を導いているのなら、誰もその人を打ち負かすことはできない。

サラスワティー(知識の女神)のところから光の一筋が来るとすごい力がついて、どんな大学者でもウジ虫みたいに見えてくる。

ランプに明かりがつくと、蛾どもは群れをなしてやってくる。招よばれたわけでもないのに——。それと同じように、神の命令を受けている説教師は、聴まきに來てくれと云つて招まく必要はない。講演レクチャーの日や時間を広告する必要もない。どうしようもない引力にひかれて、人々は自然まに集まってくる。あらゆる階級の人たち——王も有力者も、ぞろぞろとまわりに寄ってくる。そうしてこう言う——『あなた様は何をお供えしたらよろしいでしょうか？ マンゴーもお菓子もお金も肩掛けも、そのほかいろいろなものをご用意してございます。何をお受け下さいますか？』わたしはね、そういう人たちにこ

う返事するんだよ——『あっちへ行ってくれ。わたしはそんなものは興味がない。わたしは何も欲しくない』と。

磁石が鉄に向かつて、『おれのそばに來い！』と言うかね？ そんな必要はない。磁石の力にひかれて、鉄はまっしぐらにかけ寄って來るんだよ。

確かに、そういう人は学者ではないかも知れん。学者でないからといって、いくらかでも智識が足りないなどと思うなよ。本を読んで智慧ができるか？ 神の指図をうけた人の智識には際限がないんだよ。その智識は神のところから來るんだからね——無尽蔵だ。

郷里（くに）では穀物を量るとき、一人が秤（はか）つていると、もう一人が次々と穀物の山を押しやっている。ちょうどそんなふう（さしず）に、下命（さしず）された教師が人を導（ま）っていると、宇宙の大実母（ママ）が後ろから智識の山を次々と出して下さる。その教師の智識は無尽蔵だ。

一度マアの眼差（まざ）しをうけたら、もうその人の智慧に不足はない。だからわたしは、『神のお指図を受けたか？』と聞（き）いているんだよ」

ハズラー「ええ、そりゃ勿論、命令をお受けになりましたでしょう。いかがですか、先生？」

シャシャダル「いえ、命令ですか？ そういう経験はございませんが——」

家の主人「命令は受けておられないかもしれませんが、ご自分の義務だと思（しんが）って講義（レクチャ）していらっしやるのですよ」

聖ラーマクリシユナ「神の命令を受けていない人の講義（レクチャ）が役に立つかな？

(ブラフマ協会のある人が講義をしていて、こんなことを話した——「兄弟たちよ、この私はどれほど酒を飲んだことでしょう。こういうこともしました。ああいうこともしました」聴いていた群衆はワザワ言い始めた——『くだらん奴が何を言うつもりだろう? 酒を飲んだなんて!』そう言つて騒ぎ出した。だから、ちゃんとした人の講義でなくては役に立たないんだよ。

バリシヤルから来たえらい役人はこう言つた——「先生、大いにご布教の活動をなさいます。そうなれば、私も気合を入れませう」わたしは答へたよ——「まア、ひとつ話をお聞き。郷里にハルダル池という名の池がある。池の端を便所代わりにする連中がいた。朝早く連中はしに来るから、その時分に行つては大声で怒鳴つて追い払つていた。でも、どんなに怒鳴つても効き目がない。また次の朝やつてきてウンコをする。何日か経つて、役所からバツヂをつけた人が立て札を立ててくれた。驚いたことに、いっぺんにウンコをするのは止まつてしまつた」

だから言うのさ——「大したことない人間が講義なぞしても、何の役にも立ちやしない」と。バツヂをつけていれば人は尊敬する。神の命令を受けなくては人の指導はできない。人を指導するには、大へんな力があることなんだよ。カルカッタには大勢のハヌマーンプリ(強い格闘家)がいる。あんたはそういう連中と格闘しなけりやならないんだからね。これたち(周囲に坐っている人たち)なんか、それに比べると山羊みたいなものさ! (訳註——インドでは山羊は「ばか」を意味する)

チャイタニヤ様は神の化身だ。あの方のなさつたことさえ、口々に残つていないだろう? まして、神の命令も受けない人の説教なんか、何の役に立つ?」(訳註、チャイタニヤ様——クリシュナを歌と踊りで

讚美し信愛（パウル）することを説いた大聖者、デーヴァは聖者に対する尊称）

〔如何にして下命（さしず）されるか〕

「だから言うんだよ。神の蓮華の御足に夢中になれ！」と

こうおっしゃってから、タクールは愛に酔った風情で歌をうたわれた――

沈め 沈め 沈め

美しき海に わが心よ

深き底にゆきて探せば

聖愛（あい）の宝玉（たま） きみを待つなり

「この海に沈んでも死にはしない。これは不死の海なんだからね」

〔ナレンドラへの教訓――神の甘露の海〕

「わたしはナレンドラに言ったものさ――『神は甘露の海だ。この海に沈もうとは思わんかね、どうだ。うんそうだ、茶碗になみなみと甘いジュースが入っていて、お前は虻（あぶ）になったと思え。どうやってそのジュースを飲むつもりだい？』ナレンドラは、『ぼくは茶碗のフチにとまって首を伸ばして吸いま

すよ！ 行き過ぎると沈んで溺れてしまいますから——」と答えた。それでわたしは言つてきかせた——『ババ、これはサッチダーナンダの海だよ。ここで死ぬ気づかいはない。この海は不死の海なんだから——』^レ信仰や愛は行き過ぎちゃいけない^レ。なんて言うのは無智な連中だ。神の愛に行き過ぎがあるかい？ だからあんたにも、^レサッチダーナンダの大海に浸れ^レ。と言うんだよ。

神をつかんだら、もう何の悩みもないだろう？ それでご命令があつたら、人の指導もすればいいんだよ」(訳註、サッチダーナンダ——サット(真実在/真)、チット(智慧/智)、アーナンダ(歓喜/喜)より成る宇宙の本質、ブラフマンの実体)

得神への無限の道——信仰のヨーガこそ当世の宗教

「不死の大海に行く道は無限にあつてね、何はともあれ、この海に行き着きさえすりゃいいんだ。甘露をたたえた池があると思つてごらん。どんな方法でも、この甘露を口に入れさえすりゃ、不死になるんだ。自分で飛び込んでもいいし、石段をゆくりゆくり下りていつて、手ですくつて飲んでもいい。誰かに押されて入つてもいい。結果は一つだ。あの甘露を一しずく味わえば、不死になるんだよ。

無限の道——その中に、智識、行為、信仰などの道がある。この道を誠実に歩いていけば、神に至る。

大ざっぱに分ければ、ヨーガには三つの種類がある。^{ジュニヤナ}智識のヨーガ、^{カルマ}行為のヨーガ、^{バクティ}信仰のヨーガ。^{ジュニヤナ}智識のヨーガ——智識の行者はブラフマン(原理)を覚ろうとする。^グネーティ、^{ネーティ}ネーティ(これではな

い、これでもない)と分別判断ワイチヤールしてゆく。ブラフマンは実在、宇宙世界は幻影だと見極める。真実と虚偽を判断する。分別の極まるところで三昧に入り、ブラフマン智を得る。

行為カルマのヨーガ——これは働きを通じて神に心を結びつける。求める心なく呼吸統御ブラトイシャや瞑想ディヤナや凝念ダラナをするのもカルマ・ヨーガだ。普通の社会生活をしている人が無執着の心で働き、その結果を神に捧げる。あの御方を信仰してこの世の仕事をする。こういうのもカルマ・ヨーガだ。果報を神に捧げて礼拝称名などの宗教的行事をするのもカルマ・ヨーガだよ。神を体得つかむのがカルマ・ヨーガの目的だ。

信仰バクティのヨーガ——これは神の御名と栄光をとなえることによって、心をあの御方に結びつける。現代のような末世では、この信仰のヨーガが無理のない自然な道だ。信仰のヨーガこそ現代の宗教だ。

カルマ・ヨーガは大そう難しい。前にも言ったが、そういうことをする時間がどこにある？ 聖典に書いてあるような勤行をするヒマがどこにあるかね？ この末世では人間の寿命は短いんだ。その上、無執着で果報をアテにしないで働くなんてことは、全くもって難しいことだよ。神を覚おぼらなければ、真に無執着の心にはなれない。お前たちは気づかないかもしれんが、何処どこからともなく執着の心が忍びこんでくるものだよ。

智識のヨーガも現代いまはとても難しい。先ず第一に、人は食物なしはこの世に生存できない。それに寿命が短い。その上、肉体意識がどうしても無くならない。肉体意識が無くならない限りは、完全な智識は得られないんだからね。智者はこう言う——『私はあのブラフマンだ。私は肉体ではない。私は、飢え、渇き、病氣、悲しみ、誕生、死、幸福、不幸、こういったものすべてから超越している』と。

もし、病氣や悲しみや幸不幸などを感じていたら、お前は智者というわけにはいかないよ。手に釘がささって血がダラダラ流れてものすごく痛いのに、それでもこう言っているんだよ——『ナニ、釘なんかささっていない。私はナンでもないよ』と」

〔智識のヨーガと行為のヨーガは現代の宗教ではない〕

「だから、現代は信仰のヨーガだ。これで他の道を通るより楽に神様のところへ行ける。智識や行為や他の道を通っても勿論、神様のところへ行けるよ。でも、他の道はととても苦しい道なんだよ。信仰のヨーガは現代のための宗教だ。が、このことは、信仰者はある場所へ行き、智者と行為者はまた別な場所へ行く、という意味ではない。ブラフマン智を求め人は、信仰の道を通ってもその智識が得られる、ということだ。信者思いでやさしいあの御方は、お気持ち次第でブラフマン智を与えてくださるんだよ」

〔信仰者はブラフマン智を得られるか？ 信者は如何にして仕事をし、祈るべきか〕

「信仰者というものは、神のお姿を見たいと思ひ、またその御方とお話をしたいと思っていて、たいの場合にはブラフマン智を求めないものだ。しかし、神はしたいようになさる御方だから、その気になれば信者をご自分の力と富すべての相続人になさる。つまり、信仰も授けてくださるし、智慧も授けてくださる。カルカッタに一度行きさえすれば、要塞広場(マイターン公園)にもアジア協会の博物

館にも、どこにでも見物に行ける。

要するに、どうやってカルカッタへ行くかということだ。

宇宙の大実母マザーに会えば、信仰も得られるし智慧も得られる。両方ともいただけるんだよ。恍惚バウワウ三味サムライではお姿も見られるし、無分別三味ニルツカカルバサマでは完全無限のサッチダーナサトダを知ることも出来る。その場合には、我も名も色も形も存在しなくなる。

信仰者はこう言う——『マーよ、私は欲のともなつた仕事が恐ろしい。その仕事には貪欲が隠れているから——。その仕事をすれば、必ず実を刈り取らなければならないから——。それに、無執着になつて仕事するのは難しいから——。こういう仕事を続けていると、あなたを忘れてしまふそつだ。だから、こんな仕事は私にとつたためにならない。あなたをつかめるその日まで、仕事をだんだん減らして下さい。残っている仕事をするときは、無執着の気持ちで出来ますように——。深い信仰を持ちながら出来ますように——。あなたをつかむことのできる日まで、これ以上新しい仕事に巻き込まれないように——。でも、あなたがお命じになつた場合は、あなたの仕事をします。それ以外はしません』と

聖地巡礼と聖ラーマクリシュナ——アイチャーリヤ教師の三階級

シャシャダル「先生は、聖地巡礼にどの辺までいらつしやいましたか？」

聖ラーマクリシュナ「ほんの少し行つただけだよ、ハツハツハツハ……。ハズラーは大そう遠くま

で行った。そして、とても高い処へ登った。リシケシまで行った(皆笑う)。わたしはあんなに遠くまで行かないし、あんなに高い処まで登っていない。

トンビとハゲタカもずい分高く舞い上がるが、目は墓穴ばかり見ているんだ(一同笑う)。墓穴って何のことだかわかるかい? ——女と金さ。

もしここに坐っていて信仰が得られるものなら、聖地へ行く必要はないだろう? カーシー(ベナレス)へ行って見たが、生えている樹もこと同じ! タマリンドの葉の茂り具合も同じ!

聖地巡礼しても信仰がつかめないなら、それじゃ聖地に行った甲斐がないというもの。信仰こそ一番肝心なもの、これ一つが必要なものなんだよ。トンビやハゲタカは何のことかわかるかい? 大勢いるだろう、えらそうなことを言う連中が——。それに、お経に書いてあるようなことを私どもは随分実行いたしました。なぞと言う。そのくせ、連中の心は俗事に執着しきっている。金、財産、名声、家族の息災、肉体的快樂、こういうものにガツガツしているんだよ」

シャシャダル「本当に、おっしゃる通りでございます。先生、それに聖地に行くことは、コウストウブの玉(ナーラーヤナ神の胸に飾ってある宝石)を捨てて、ほかの宝石を探しにいくようなものでございます」

聖ラーマクリシユナ「それからあんだ、このことをよく覚えておきなさいよ——何千回導いても、時期が来なければ結果は現れない」ということ。子供が寝るとき母親に向かつて、『母ちゃん、オシッコがしたくなったら起こしてね』とたのむと、母親はこう言う——『坊や、オシッコがお前を起こしてくれるよ。気にしないでいいよ』と。はっはっは……。

そんなふうには、誰でもその時期が来れば、いやでも神様を慕うようになるものだよ」

〔それぞれの器量を見て教えよ——神は慈悲深いか？〕

「医者にも三種類ある。」

病人の脈をみて、薬を処方して帰ってしまう。病人に向かって、ただ、『薬を飲みなさいよ』と言っただけ——。こういうのは最低の医者だ。それと同じように、教訓を与えただけで、それが当人にとつて結果が良かったか悪かったか見きわめない教師がいる。弟子たちのことを気にかけていないんだよ。

また、こういう種類の医者がある。薬を調合して病人に、『薬を飲みなさい』と言う。もし病人が飲もうとしないと、なだめすかしたりして飲ませようとする。こういうのは中級の医者だ。こんなふうに、教師にも中級の教師というのがある。教訓を与えて、その上、何とかしてその教えに従わせようと努力する。

それから、最上級の医者がある。やさしくすすめても病人が言うことを聞かない場合は、力尽くでも従わせる。必要とあれば、病人の胸ぐらを押さえて薬を流し込むことさえする。それと同じような教師は最上の教師だ。その方々は神の道に引き入れるために、弟子に暴力をふるうことさえしてくださる」

シャシャダル「先生、もしそういった最上の教師がいるのでしたら、なぜあなた様は、『時期がこなければ智慧は生じない』というお話をなさったのですか？」

聖ラーマクリシユナ「そりやそうだ。でも考えてごらん、もし薬が胃袋まで届かなかつたら、口から吐き出してしまふようなら、医者はどうする？ 最上級の医者だって、どうすることも出来ないよ。

容れものを見た上で教えを授けなけりゃいけない。あんた方は容れものを見て教えることをしない。わたしのところへ青年たちが来ると、わたしは先ず質問するんだ——『お前はどんな境遇かね？』と。考えてもごらん、父親がなかったり、または父親に大きな負債があつたりしたら、その青年はどうして神に心を向けることができるかね？ あんた、よく聞いているかい？」

シャシャダル「はい、よく聞いております」

聖ラーマクリシユナ「ある日、神殿にシーク教徒の兵隊が何人か来た。大実母^{ママ}カーリーのお堂の前で彼らに会つたよ。そのなかの一人が、『神様は慈悲深い御方です』と言つたから、わたしは聞いた——『ほんとかい？ どうしてわかる？ どうやってそのことがわかつたんだね？』彼らは言つた——『どうしてって、お上人様^{マハーラジ}、神様は私どもを食べさせて下さいますし、何かと世話をして下さいさるでしょうが！』わたしは、『それがどうしたい？ 神様は皆のお父さんだよ！ 父親が子供の面倒を見なくて誰が見てくれる？ あつちの町の人たちが世話してくれるのかい？』

ナレンドラ「じゃ、神を慈悲深いと言つてはいけないのですか？」

聖ラーマクリシユナ「『あの御方が慈悲深いと言ふな！』とわたしが止めたかい？ わたしの言う意味はね、神様は私らにとつて一番身近なお方、身内だということだ。よその人じゃないということだよ」

シャシャダル「無上のお言葉！」

聖ラーマクリシユナ「お前の歌をきいたが——あんまりよくなかった。だから二階に行ったんだよ。職探して気もそぞろだから、歌に味がないんだよ」

ナレンドラは恥じ入って赤面した。彼は黙っていた。

別れ

タクールは水を飲みたいとおっしゃった。この方のそばに水の入ったコップがあったが、その水はお飲みなれないようであった。それで、別のコップに水を持ってくるようにお求めになったのである。後でわかったところによると、はじめのコップは或るひどく不品行な人物が触ったものであった。

シャシャダル「(ハズラーに向かって)この御方と日夜いっしょに暮らしておられて、あなた方は実に恵まれていらっしやいますね」

聖ラーマクリシユナは笑いながらおっしゃる——「ハハハハハハ。今日はわたしにとって大へんな日だったよ。わたしは二日月を見たんだから(一同笑う)。二日月の意味がわかるかい？ シーターがラーヴァナにこう言った——『ラーヴァナ、おまえは満月ね。そしてラーマはわたしの二日月——』ラーヴァナは意味がわからずに、ほめられたと思ってえらく喜んだ。シーターはこういうことを言ったのさ。ラーヴァナの栄華も行くところまで行ったから、今度は満月がだんだん欠けていくように、日に日に細くなっていくだろう。ラーマは二日月、あの方は日に日に大きくなる！」(訳註——

ラーヴァナはランカの王でラーマの妻シーターを奪ったが、ラーマに亡ぼされた。

タクルルは帰ろうとなさった。学者シヤシヤダルは友人や親戚たちと共に、うやうやしく礼をした。タクルルは信者たちを連れてお帰りになった。

イシヤンの家に戻って――

タクルルは信者たちと共に、イシヤンの家にお戻りになった。まだ日は暮れない。イシヤン家の階下の応接間に入ってお坐りになった。信者たちの誰彼がいる。バーガヴァタの学者、イシヤン、イシヤンの息子たちも同席している。

聖ラーマクリシュナはにこにこ笑いながらおっしゃる――「シヤシヤダルに言ってきたよ。――『木に登らずに果物の大房を取ろうとするな』と。それから、『もう少し修行をしろ。讚神歌をうたえ。それから人を導け』とね」

イシヤン「誰でも、自分が人に教えようと思っております。土ポタルでも、私は世界を照らしていると思つていましょう。ある人がこう言つたそうです。――『コレ、土ポタルよ！ 世の中を明るくしていると思つているのかい？――ヤレヤレ、お前は闇の暗さをいつそう増しているんだよ』と」

聖ラーマクリシュナ「(にこつと笑つて)でも、あれはただの学者じゃない。いくらか識別と離欲を心得ているよ」

バッタパラからきたバーガヴァタの学者もまだそこに坐っている。年令は七十から七十五才の間だろ。彼はタクールをじつと見つめていた。

バーガヴァタの学者「あなた様は偉大な魂マハートマであられる」

聖ラーマクリシュナ「ナーラダ、ブラフラーダ、シユカデーヴァ、こういう方々はそう申し上げてもいいが——わたしなんぞ、あんたさんの子供のようなものですよ。

でも、考えようによってはこうも言えますよ。神の信者は神より偉大だ」と。なぜなら、信者は神様を胸に抱いて持つて歩いているんだからね（一同喜ぶ）。信者は、神を低いもの、自らを大なるものぐとみる。ヤシヨーダー（クリシュナの養母）はクリシュナを縛つておこうとした。ヤシヨーダーは、自分がクリシュナの世話をしなければ、誰がこの子を見てくれるだろう」と信じ切っていたのだ。時には神が磁石になり、信者が針になる。神が信者を引きつけるんだ。また時によると、信者が磁石になり、神は針となる。信者の強い愛に引きつけられて、神さまはその人のそばに近寄つておいでになる」

タクールは、やがて南神村ドツキネーシヨルにお帰りになるだろう。階下の応接間の南側のペランダに出て立つていらつしやる。イシャンはじめ信者たちも立っている。タクールは、イシャンにいろいろな喩えたとをつかつて教訓を与えておられる。

聖ラーマクリシュナ（イシャンに）普通の社会生活をしながら神を呼び求める人こそ、雄々おしい信者だよ。神様はこうおっしゃるだろう——『出家したものが、わたしに祈つたり仕えたりしたとして、

それは極く当り前のこと。もしそうしなければ、人はみなチエツ、チエツと舌打ちするだろう。だが、世間の真つ只中にいてわたしに呼びかける人——何百キロもの大石を押しつけながらわたしを見ようとする人をこそ祝福してあげよう。そういう人こそ、雄々しく高貴な魂なのだ——彼こそ真の英雄だ」と

バーガヴァタの学者「経典(マハーバータ)にもそのことが書いてあります。正信の狩人と貞節な女(貞節)の話でございます。森のなかで苦行をしていた行者が腹を立ててにらみつけたカラスが、たちまち灰になってしまいました。苦行者は、おれも大した進歩をしたものだ。一にらみでカラスが灰になろうとは——といいい気持ちでした。彼は貞節な女の家に托鉢に行きました。その女は夫を仰ぎ慕って、夜も昼も片時もそばから離れないようにして仕えております。夫の足を洗ったあとは、自分の髪でその足を拭いてやるほどでございます。苦行者が訪れて施しを乞うているのになかなか家のものが出てこないのです、彼は声を荒げて言いました——『あんた方、いいことはありませんぞ』貞節な女はすぐ奥の方から答えました——『わたしは、カラスを灰にするようなわけにはいきませんよ。ちよつとお待ち下さいましな。いま夫の世話をすましてから、拜ませてもらいますから——』カラスを灰にしたことを知っているのに驚き、教えを乞いました。

その貞女に聞いて、ブラフマン智を教えてもらうために、正信の狩人のところへ行きました。その狩人は獣の肉を売っていましたが、昼も夜も両親を神と思つて仕えているのでした。ブラフマン智を教わろうと思つて行つた苦行者はびっくり仰天して——内心思うには、『なんだこの狩人は、獣の

肉を売っている俗物じゃないか！ これでこの私にブラフマン智を教えてくださいのだろうか』しかし、この狩人こそ俗世の義務を誠実に果たすことよつて、完全な智慧の人となつたのでございます。この狩人に教えられて、行者は真理を悟りました」

タクールはやがて馬車にお乗りになる。となりの家（イシヤンの義父の家）の門前にお立ちになつた。イシヤンと信者たちもその傍に立つている。乗る際にこの方をお助けするつもりだろう。タクールはまた、たとえ話でイシヤンに教訓をお与えになつた――

「蟻のようにしてこの世に住め。この世には、永遠なものとは、一時的なものは、混ざつていゝ砂糖と砂糖が混ざつていゝ。蟻になつて砂糖をとれ。

この世は水と牛乳がいつしよになつていゝ。至高精神の歓喜と世俗（五官）の快樂とだ。白鳥のように水を分けて乳を飲め。

また、水鳥のようにね――。体に水がかかつても弾き返すだろう。

それから、泥魚のように！ 泥のなかに住んでいても、体はいつも清らかに光り輝いていゝ。ごちゃ混ぜの中に、よく見ると正しいものがある。ニセモノをすてて、ホンモノをつかめ」

タクールは、馬車に乗つて南神村トブキョーシヨルに向かわれた。

（訳註2）マハーバーラタの中で聖者マールカンデーヤがユディステイラに語つた話。（マハーバーラタ・第三卷『森林の卷』第一九六章〜二〇六章参照）